

ベトナム社会主義共和国中部山村における二次的自然の利用・管理

○ 調査年月日：2008年10月29日

○ 調査実施者：松島昇、市河三英

1. はじめに

ホンハ村(Hong Ha)は中部ベトナムの都市フエから45キロメートル離れた山間地の少数民族の村である。1960年から75年までのベトナム戦争中戦火を逃れてラオスへ離村した村人が、戦後に戻って再建された村である。中部ベトナムは年間平均気温25度、年間降水量3000-4000mmに及び熱帯雨林に覆われた山間地帯である。この地域には台風や集中豪雨や洪水が頻発するなど自然災害の多い地帯である。そのため治山治水政策として政府は、少数民族に対して早成樹種の造林や焼畑禁止を進める。一方少数民族にとって焼畑は、山間の森林地帯で自然に順応した生活を維持させていく上での伝統知識として重要な位置を占めている。

本調査では、焼畑等の伝統知識を基礎とする山村の少数民族が、どのようにして政府の政策を受け入れて劣化した森林資源を回復させ、二次的自然として維持し、どのような工夫のもとでそれを持続可能な形で利用・管理しているかを検討することを課題とした。

2. 調査の概要

2.1. 調査対象地

ホンハ村は、フエ市に沿った広大で、豊かな海産物を産するタムギアン・ラグーン的主要な河川であるボー川の上流域の標高600m前後の地域に位置する山村で、人口は2006年調査で1,312人(285世帯)ある。さまざまな民族からなり、カトゥ族が41パーセント、パコ族が30パーセント、タオイ族が17パーセント、ベトナムの主要民族のキン族が10パーセント、その他が2パーセントを占めている。この村はベトナム中部の典型的な少数民族の山村であると言ってよい。

ボー河上流域に生活していた少数民族の生活様式は、戦争によって劇的に変化している。彼らは山中での焼畑作業から、川岸氾濫原での水田耕作を基礎とする集落へ移動した。平和で気持ちの良いなだらかな農村景観の背後に、過去の遺物が残っている。荒廃した森林、爆撃孔そして爆弾殻などが、村人が過去に経験した戦争を象徴している。



図1 調査地ホンハ村

出典：Google マップ. <http://maps.google.co.jp/maps?hl=ja&tab=w1>



写真1 ホンハ村
出典：Mizuno [2008].

2.2. 調査方法

長期の戦争を経験し、何回もの移住を繰り返してきた少数民族の生活は貧しい。自然災害の多いこの地域を、農村振興と森林資源回復等による流域管理を達成させようとするプロジェクトが、フエ大学とカナダ政府の支援（フェーズⅠ 1998－2001、フェーズⅡ 2002－2004）で行われている。2005年以降も同様に、フエ大学に京都大学地球環境学堂（GSGES Asia Platform）やJICAプロジェクト「ベトナム中部・自然災害常襲地での暮らしと安全の向上支援」（期間 2006年～2009年）が加わって農山漁村振興の活動が継続されている。本調査では、プロジェクトサイトをフエ、京都両大学のスタッフとともにプロジェクト現地を見学するとともに、豊富な調査報告資料を収集した。特にフエ大学のスタッフは、大学教員であるだけでなく、専門領域を農山漁村の振興プロジェクトの現場で推進させてきた実績を持っている。

3. 調査結果

3.1. 土地利用の大きな変化

1970年代半ば以降の村の略史について、土地・資源利用に関わる重要な出来事を中心に、表1にまとめた。

表1 ホンハ村アロム集落の歴史概況

年次	歴史概況
1974	政府の指導でボー川流域に移住 少数民族カトゥ族 15戸計 50人 対米戦争中の枯葉剤使用により森林資源は 1968年以前ほど豊富でない 村に境界がない 村人は非木材林産物収集、家屋建設用木材伐採・焼畑は 2年間の農作と 3-5年間の休閑・焼畑で陸稲、トウモロコシ、キャッサバ等を栽培
1976	協業モデルを用いて水稲栽培の開始（小面積）
1978	村外者が村民と農作物の交換のため来村 村人口 25戸・森林保護局による農民へ森林保護のために焼畑禁止命令 水稲栽培面積 1ヘクタール
1993	森林保護局による焼畑停止命令を農民が受入れる アカシア植林による植林計画の開始 村人口 35戸（カトゥ、タオイ、キン）

1995	水管理委員会による森林管理 多くの村人が焼畑停止 主要食糧出そろ 再造林、治水事業の一環として森林保護局によるアカシア種子の配布 村人口 35 戸 村外者が円錐帽の材料であるラタンの取引に来訪（ホンハの村人も材料を収集） 村人建築材を伐採
2004	政府が良質家屋建設を推奨(融資及び物資の奨励策を含む) 村人口 48 戸（カトゥ 43 戸, タオイ 2 戸） 水稲栽培水田 約 1.2ha
2005	村人口 51 戸（237 人） 依然として村境界不明瞭 水管理委員会による森林管理（村には林地の分配はない）

出所：Boivin T., Dean A. Land Use and Biodiversity Map (2006)

この表に示されるように、少数民族の中心的な焼畑作業は、戦後まもなく 1978 年に禁止された。村民が実質的に焼畑禁止を受入れたしたのは 1995 年ごろからである。災害の常襲地帯の上、ベトナム戦争中における枯れ葉剤の使用もあって、早急な森林回復を目指して早成樹種の造林を進めるとともに、焼畑禁止を村民の少数民族に求めた。アカシア・マンギウム (*Acacia mangium*) は、パルプ用材として 5-6 年生の短伐期での収穫できることから、ゴム造林とともに拡大している。

表 2 ホンハ村 5 集落の土地利用 (2006 年, 単位 : ha、%)

土地利用	パイ	カン トン	カン サム	パー リン	アロム	計 (ha)	率 %
原生林	0	235	0	469	0	704	14.2
老・中齢二次林	156	194	215	512	0	1,077	21.8
若齢二次林	151	147	50	263	67	678	13.7
アカシア造林	139	677	170	131	591	1,709	34.6
ゴム造林	81	62	24	0	68	235	4.7
ゴム・アカシア造林	0	97	0	0	93	190	3.8
竹林	0	0	0	6	11	17	0.3
焼畑地	13	40	29	31	28	142	2.9
水田	7	52	7	19	49	134	2.7
砂地	9	0	7	0	2	18	0.4
裸地	19	9	5	8	0	41	0.8
特殊地	0	0	0	1	0	1	0.0
計	575	1,513	507	1,440	909	4,945	100.0

出典 : Boivin T., Dean A. Land Use and Biodiversity Map (2006)

以上のような経緯から、現在では、ホンハ村 5 集落の土地で原生林はわずか 14.2 パーセントとであり、老・中齢二次林が 21.8 パーセント、若齢二次林が 13.7 パーセント、それに対してアカシアやゴムなどを植栽している人工造林地は 43.1 パーセントに達している(表 2)。

原生林はもはや限られており、山間地でもともと焼畑作業が行われていたところである。政府は焼畑禁止を少数民族の地域住民に通告するとともに、アカシア、ゴムなどの造林にも治山機能があり、住民にも大きな収益をもたらすものとして早成樹造林を推進した。政府が提案する焼畑禁止と治山造林、それに貧しい住民に比較的短期間に収益がもたらされることとが結びついて、アカシア、ゴムなどの人工造林が急速に拡大した。ただし、パルプ用材のアカシアは 5-6 年生の超短伐期であり、ゴムにしても 25 年程度の伐期である。余りの短伐期造林の繰返しがいつまで続き、はたして治山機能も十分に機能するかは今後とも配慮の必要な課題である。

このような土地利用上の変化は、少数民族の生活拠点をかつての山間地から山裾の川辺に移動させたこととなる。焼畑禁止は水田耕作を進める意味もあり、水田は灌漑の便から主に川辺に位置している。今日では少数民族も水田のすぐ上部で焼畑を営むように、かつ

では山中にあった傾斜地畑も、近年川辺で水田作業を行い、水田上方の傾斜地畑＝焼畑地にはキャッサバを主要な作物として栽培している。



写真2 水田を囲むキャッサバと背後に茂るアカシア・マンギウム

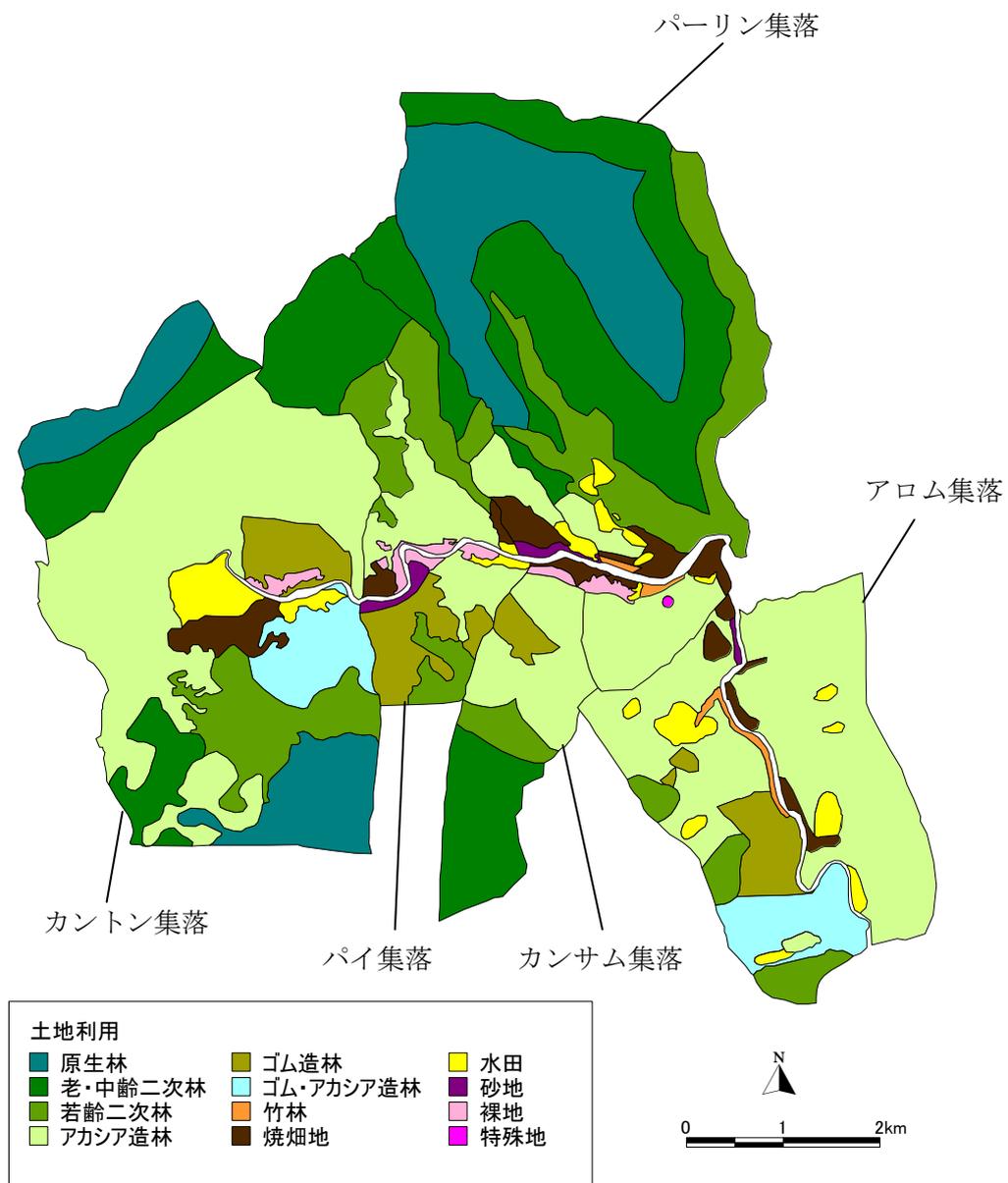


図2 ホンハ村5集落の土地利用

出典：Boivin T., Dean A. Land Use and Biodiversity Map (2006)

3. 2. 焼畑少数民族の伝統的農業知識

表 3 カトウ族の農業暦

月	Katu 族の月の名称	経験 (標徴)	主要な活動
1	Xe Muoi	雨を伴う寒さ	狩猟
2	Xe Bar	日が上昇し始める	焼畑農耕地選定、トウモロコシ播種、サツマイモ栽培、狩猟
3	Xe Pa	暖かい日差し、多くの蜂出現	森の伐採、トウモロコシ植栽地の除草、キャッサバの植栽
4	Xe Puon	暖かい日差し、多くの蜂の出現、米の開花	火入れ、陸稲の播種、トウモロコシとキャッサバの収穫
5	Xe Xan	曇りの天候、暴風雨	陸稲の播種、キャッサバ植栽地の除草、トウモロコシ収穫
6	Xezpak	暖かい日照、暴風雨、セミ	陸稲栽培地の除草、出作り小屋の建設、狩猟、蜂蜜の探索
7	Xe la pang	多くのアリ	陸稲の保育、農地に垣の設置、米の貯蔵庫の設置、狩猟
8	Xe Tcan	多くの鳥の鳴き声	米 (three month rice) の収穫、季節米 (seasonal rice) の除草、狩猟、手芸 (編物)
9	Xettri	雨	女性による収穫、男性による狩猟、編物、家の修繕
10	Xe Mzieo	曇りと雨の天候	米の収穫、タケノコやキノコの採取
11	Xe Zieomai	寒さ	米の乾燥と貯蔵、狩猟、漁労
12	Xe Zieo bar	一段と強まる寒さ	新米祭 (new rice festival)

出典 Hong, N. X. 2002. Indigenous Knowledge of Hong Ha People in Their Traditional Slash and Burn Cultivation, Community-based Upland Natural Resource Management, Hue University of Agriculture and Forestry.

ベトナム戦争の終了した 1975 年以降、ホンハの人びとは、造林、畑作・ホームガーデン経営、魚の養殖、水稻栽培、小規模な商取引などに従事してきた。しかし、彼らの伝統的経済は、焼畑耕作、家畜飼育、狩猟、林産物採集、織物、燃材採取などである。これらの伝統的な生業活動のなかでも、焼畑農耕は、重要な役割を果たしており、年中行事など他の活動にまで影響をあたえていた。焼畑農耕は長期にわたって行っており、ホンハの人びとの暮らしのなかに強く残っている。現在、森林面積が限られていることや、経済構造の変化、そして、焼畑禁止の国家政策によって、次第に焼畑用地は減少してきている。しか

し、ホンハの人びとの意識や考え、そして現実の生活のなかで焼畑農耕の重要性が失われたことを意味しない。

例えば農民にとって基本である畑地の土壌評価は、焼畑農耕のサイクルの最初の段階に行われるもので、収穫に影響を与える重要な作業である。ホンハの人びとは、土の色、土壌の特徴、植生などから良い土と悪い土を見分けている。地域住民は土壌や地形に応じてその場所にあった作物を植えている。「良い土」のある場所では、人びとは、彼らの食糧需要を満たすために、米、トウモロコシ、キャッサバを植える。もっともプライオリティの高い作物は米であり、キャッサバ、トウモロコシ、豆、サツマイモ、野菜は間作されている。逆に「悪い土」では、土地肥沃度が低下するまで、キャッサバ、バナナ、タバコを植える。そしてその後、5年から7年間、休閑する。現在、森林地域の減少と人口増加により、住民は休閑地で経済的価値のあるユーカリ、竹、マツなどを植栽している[Hong n.d.]。



写真3 ホームガーデンのサトイモ



写真4 ホームガーデンのハイコショウ



写真5 ホームガーデンのコショウ



写真6 主食のように食べるキャッサバ

表4 ホンハ村で食用に利用されている野生植物

No.	Local name	学名	科名	和名、俗名など	英名
1	Ilasoiazong	<i>Amaranthus spinosus</i>	ヒユ科	ハリビユ	Amaranth
2	Plochom	<i>Amaranthus blitum</i>	ヒユ科	イヌビユ	Slender amaranth
3	Chrun	<i>Mangifera</i> sp.	ウルシ科	マンゴー	Wild mango
4		<i>Annona chrysophylla</i>	バンレイシ科	カスタードアップルの仲間	Custard apple in forest
5	Arop	<i>Centella asiatica</i>	セリ科	ツボクサ	Indian pennywort
6	Batngo	<i>Eryngium foetidum</i>	セリ科	オオバコエンドロ	Long-leaved coriander
7	Alulo		サトイモ科	サトイモの仲間	a kind of wild taro
8	Aro	<i>Colocasia esculenta</i>	サトイモ科	サトイモ	a kind of wild taro
9	Voviing	<i>Homalomena occulta</i>	サトイモ科	センネンケン (薬草、千年健)	a kind of wild taro
10	Atac	<i>Homalomena pierreana</i>	サトイモ科	サトイモの仲間	a kind of wild taro
11	Clvang	<i>Panax vietnamensis</i>	ウコギ科	ベトナムニンジン	Ginseng
12	Colum	<i>Brassaiopsis glomerulata</i> var. <i>brevipedicellata</i>	ウコギ科		
13	Atut	<i>Caryota mitis</i>	ヤシ科	カブダチクジャクヤシ	Clustering fishtail palm
14	Chalo	<i>Corypha lecomtei</i>	ヤシ科	コウリバヤシの仲間	a kind of fan palm
15	Chavi	<i>Calamus poilanei</i>	ヤシ科	籐の仲間	Elephant rattan
16	Davuon	<i>Calamus rudentum</i>	ヤシ科	籐の仲間	Lizard Rattan
17	Kirechom	<i>Calamus</i> spp.	ヤシ科	籐の仲間	Rattan
18	Tuvac	<i>Arenga pinnata</i>	ヤシ科	サトウヤシ	Sugar palm
19	Ngoaio	<i>Gynura crepidioides</i>	キク科	ベニバナボロギク	
20	Tritter	<i>Auricularia auricula-judae</i>	キクラゲ科	キクラゲ	wood ear mushroom
21	Caphot	<i>Hydrocera triflora</i>	ツリフネソウ科		Marsh henna
22	Ater imu	<i>Basella alba</i>	ツルムラサキ科	ツルムラサキ	Ceylon spinach
23	Kiteratuot	<i>Begonia rupicola</i>	シュウカイドウ科	ベゴニアの仲間	
24	Vang ngoc	<i>Tabebuia chrysostricha</i>	ノウゼンカズラ科	コガネノウゼン	Golden trumpet tree
25	Ater	<i>Commelina</i> sp.	ツユクサ科	ツユクサの仲間	Day flower
26	Rau muong	<i>Ipomoea aquatica</i>	ヒルガオ科	ヨウサイ (空心菜)	Swamp morning glory
27	Angung	<i>Cyathea</i> sp.	ヘゴ科	シダ植物 ヘゴの仲間	
28	La	<i>Dioscorea alata</i>	ヤマノイモ科	ダイジョ、ヤマノイモの仲間	Water yam
29	Cortondac	<i>Diplazium esculentum</i>	オシダ科	クワレシダ	Variable spleenwort
30	Ata	<i>Baccaurea sylvestris</i>	トウダイグサ科	ランバイの仲間	a kind of burmese grape
31	Dadoi / Marlon / Ata	<i>Baccaurea</i> spp.	トウダイグサ科	ランバイの仲間	Burmese grape in forest
32	Bong	<i>Erythrina variegata</i> var.	マメ科	デイゴ	Coral tree
33	Adu	<i>Allium bakeri</i>	ユリ科	ラッキョウ	Shallot
34	Chal lai	<i>Angiopteris confertinervia</i>	リュウビンタイ科	シダ植物 リュウビンタイの仲間	
35	Korchol	<i>Melastoma malabathricum</i> ssp. <i>normale</i>	ノボタン科	マルバノボタン	
36	Panai	<i>Artocarpus rigidus</i> ssp.	クワ科	テンブニ	Jackfruit in forest
37	Tarung	<i>Ficus auriculata</i>	クワ科	オオバイチジク	Elephant ear fig tree
38	Aluet	<i>Musa acuminata</i>	バショウ科	サンジャクバナナ	Banana in forest
39	Dang	<i>Knema globularia</i>	ニクズク科	ニクズク	
40	Clim	<i>Rhodomyrtus tomentosa</i>	フトモモ科	テンニンカ	Tomentose rose myrtle
41	Arien	<i>Averrhoa carambola</i>	カタバミ科	ゴレンシ、スターフルーツ	Star fruit
42	Chal loa	<i>Piper lolot</i>	コショウ科	(<i>P. sarmentosa</i> はハイゴシヨウ)	Piper sarmentose
43	Xeng	<i>Plantago major</i>	オオバコ科	トウオオバコ	Plantain
44	Abang	<i>Bambusa</i> spp.	イネ科	ホウライチクの仲間	a kind of bamboo
45	Ngoi	<i>Imperata cylindrica</i> var. <i>major</i>	イネ科	チガヤ	Alang-alang
46	Tuvir	<i>Dendrocalamus patellaris</i>	イネ科	タケの仲間	a kind of bamboo
47	Giay leo lam thuoc	<i>Polygonum multiflorum</i>	タデ科	ツルドクダミ	Multiflorous knotweed
48	Trken	<i>Polygonum odoratum</i>	タデ科	タデの仲間	Vietnamese coriander
49	Plumplot	<i>Lysimachia decurrens</i>	サクラソウ科	シマギンレイカ	a kind of loosestrife
50	Apat	<i>Rubus alcaefolius</i>	バラ科	キイチゴの仲間	Black berry
51	Tibang	<i>Mussaenda cambodiana</i>	アカネ科	コンロンカの仲間	
52	Corulo	<i>Nephelium lappaceum</i>	ムクロジ科	ランブータン	Rambutan
53	Bachacloa	<i>Houttuynia cordata</i>	ドクダミ科	ドクダミ	Houttuynia
54		<i>Corchorus olitorius</i>	シナノキ科	タイワンツナンソ (シマツナンソ)	Jew's mallow
55	Corong	<i>Trema orientalis</i>	ニレ科	ウラジロエノキ	Pigeon wood
56	Acai	<i>Zingiber acuminatum</i>	ショウガ科	ショウガの仲間	Ginger
57	Dunnuouteeng	<i>Curcuma domestica</i>	ショウガ科	ウコン	Turmeric
58	Papung	<i>Alpinia galanga</i>	ショウガ科	コウリョウキョウ	Galangal

出所: Yamasaki et al. 2007. を改変

注：Yamasaki et al. 2007 を改変。

3.3. 豊富な野生植物の知識と利用

「“旱魃のときも、山に行けば食べるものがある” 豊かさを、次の世代に残すことも大切ではないだろうか、という問いかけを、彼らに、そして私たち自身に投げかけた（水野啓、2008）」。山村ホンハの住民活動の調査から「伝統的経済様式のなかでも、焼畑農耕は、重要な役割」（Dr.Nguyen Xuan Hong,2002）という考えが提出されている。1990 年以來政府が焼畑禁止をかかげても、現実のホンハでは焼畑面積が 2005 年調査でもあるように、以前重要な位置を占めている。灌漑水田がまだまだ足りない現状では、当然にして欠乏する部分を自然資源に多く依存し、利用する。

さらに、半栽培を含めて、積極的な野生植物の利用がある。表 4 は、ホンハ村において食用に利用されている野生植物のリストである。本表をよく見ると、マンゴー、サトイモ、ヤシ、キララゲ、ヤマノイモ、ラッキョウ、タケ、ランブータン、シャウガ等の一般的に食用となっているものと、ハリビユ、イヌビユ、ツボクサ、ツルムラサキ、ツユクサ、ヘゴ、デイゴ、ツルドクダミ、ドクダミ等の食用とすることに疑問のあるものから、和名からも見当がつかないものまでである。ただし、この表は人間が様々な野生植物から、味、香り、歯応え、腹持ち等より「野菜」を吟味して選択していることを示唆する。その原生の植物は森林の中や湿地などに生えているのだが、その山間地での場所を村人は知っているばかりか、それらを有用植物として住居、畑、焼畑の休閑地、水田など集落の周辺に移植してきたと考えられる。野生植物であるとともに、明らかに選択された二次植生の仲間である。



写真 7 ホンハ村への路上の
地方マーケット



写真 8 マーケットのシソクサ

同 4 表は、2006 年 8 月と 9 月に京大地球環境学堂の大学院生である Kaori Yamasaki さんが作成したものである。Yamasaki さんは、同村の住民からの聞き取りと住民と一緒にホー

ムガーデン、集落周辺の水辺、焼畑休閑地、畑周辺のルートセンサスによって食用となる野生植物の種類を採取した。全部で 89 種採取したが、学名まで同定できたのでも 58 種に達した。そこでは採取できた野生植物を 3 グループに区分している。第一はヤシや籐 (rattan) を含むヤシ科 *Arecaceae* のグループの 6 種である。ヤシや籐の果汁 (表中 13、14、15、18) はそのままジュースとして飲料となり、また酒の原料 (表中 18) となる。籐の新芽や茎 (表中 15) はスープの具となり、かつ籐の果実は 3 種 (表中 14、15、16) とも食用となる。

第二のグループは香辛料である。セリ科のツボクサ (表中の 5)、オオバコエンドロ (同 6) は、ベトナムやタイの料理の重要な香味野菜である。同様にショウガ科 *Zingiberaceae* のショウガ (同 56)、カレー粉の主成分であるターメリックの原料であるウコン (同 57)、ショウガ同様に淡水魚の臭み抜き等の香辛料となるガランガ (同 58: トムヤムクーンでは必須の香辛料) は、エスニック料理として評判の高い東南アジア料理の代表的な香辛料が、山間の少数民族の住居の周囲にも存在している。

これに対して第三のグループは高木状である。野生のマンゴーの木 (表中 3) から、葉まで食用に利用する。同じくコガネノウゼン (表中 24) やデイゴ (表中 32) も葉を食用にする。ハウライチク (表中 44) のタケノコも当然食用にする。ヘゴ (表中 27) はシダ植物であり、新芽は巨大なワラビのような形をしており、上品な芳香がありウドやタラノメにも似た食感がある食材である。野生植物を食用野菜等としても利用する豊富な知識は、従来と変わりはないと考えられる。

4. 課題

4.1. 出費調達先としての森林資源

ホンハ村の少数民族はベトナム戦争後、政府の焼畑禁止を徐々に受け入れ、山間地ではアカシアやゴムの人工造林を拡大した。川辺の水田はなお面積的に不十分なため、不足する食糧は大量かつ多くの品種のキャッサバで補充されている。ただし、ベトナム料理の豊富な野菜は、山村であるホンハ村といえどもホームガーデン、集落周辺の水辺、焼畑休閑地、畑周辺など山裾の傾斜地に、自生もしくは半栽培されている。その面で住民による里山利用は非常にさかんである。

そして、急速なアカシアやゴムなどの人工造林に対するモノカルチャーへの懸念は既に述べた。さらに森林管理上問題となるのが違法伐採である。村人にとって森林資源は、家族の病気、教育費や衣料品など臨時出費の調達先である。村人はラタンやヤシの葉など販売できる非木材林産物の採取でもって、臨時出費をまかなう。それはきつい仕事ではあるが、確実に収入となる。表-5 で 76 戸が回答している臨時出費の調達先とは、非木材林産物 (NTFP) のことである。

同様の質問に「木材伐採の収入」を回答したものが49戸あり、年齢は24-38歳の者である。これは木材伐採＝違法伐採を意味している。デリケートな問題であるから、当然実態よりかなり少なめの数字と見るべきで、インタビュー調査でほとんどの家では木材伐採を話題とすることはできない。そのような中でも、村の青年の多くが森に行って木材伐採を行ってそれを販売したり、違法伐採マフィアの作業を請け負ったりしていると回答者は証言している。しかも青年はその金をほとんど家にはいれずに、飲み代としてしまい、金がなくなれば、森に行くと云う。この金は多くの家では生活のための収入としていない。

表5 臨時出費を賄う森林資源利用についての回答内訳(2006年)

質問事項	非木材林産物の収入		木材伐採の収入	
	回答者	割合 %	回答者数	割合 %
無回答	3	1.1	2	0.7
否定	194	71.1	222	81.3
肯定	76	27.8	49	17.9
合計	273	100.0	273	100.0

出所：GSGES of Kyoto University and Office for International Co-operation of Hue University. n. d.
Report on the result of baseline survey in Hong Ha

ベトナムの主要民族はキン族である。山岳少数民族は辺境の山間地帯に居住する。少数民族は主要民族から軋轢を受ける立場にあり、それがまま憂さ晴らしの飲酒となり、飲み代は違法伐採で稼ぐが、違法伐採マフィアもまたキン族が支配する。フエ大学講師のトゥン博士によれば、「武器をもつキン族支配の違法伐採マフィアに対して、森林管理局の役人は武器を持たないため、積極的な取り締まりを実行することもできない。そして隣接する中国のさかんな木材需要から有利な販売資源として密輸されている」。豊かな森林生態系が自らの生活基盤であるという自覚もないままに、少数民族、憂さ晴らし、違法伐採、森林の劣化が悪循環として進行している事実は、山村にとって深刻な環境問題であるとともに、途上国の森林生態系劣化に共通する大きな環境教育の課題でもある。



写真9 ホンハ村に多いキャサバ



写真10 コミュニティーハウスと伝統的民族衣装の女性ら

注：水野啓（京都大学地球環境学堂）撮影

4.2. プロジェクト目標となる生態系の回復

このような山岳森林地帯での悪循環は少数民族の家族生活にあっては、低い女性の立場としてジェンダー問題が存在する。少数民族の厳しい生活のしわ寄せは、家庭においては女性に押し付けられる。「家族を養うために、農作業、森林での採集、家事、子育て等の仕事に、一日平均一五時間ほどを費やしていた」（トレイシーガノン、飯塚明子、グエン・チ・ホン・マイ、2008）。しかも酒に酔った夫による家庭内暴力の犠牲などまである。

このような少数民族の社会や生活の深部まで調査が可能となったのは、フエ大学と京大環境学堂の研究者らがインタビュー対象の少数民族と信頼関係を築き上げた成果でもある。それをこのプロジェクトチームが、一つは少数民族の伝統的な手法によるコミュニティーセンターの建築と、もう一つは婦人たちへの民族衣装の伝統織物教室を実施することによって獲得したものである。伝統木造建築にしろ、伝統織物にせよ、少数民族自らの独自の文化や技術に誇りをもって見直し、豊かな生物多様性もつ生態系が生活基盤であり、豊かな生態系の回復への好循環を築くための目標であると考えられる。

参考文献

- Boivin T., Dean A. n.d. Land Use and Biodiversity Map (2006), Canadian Space Agency and aims to support the Green Corridor Project, WWF, and the Government of Viet Nam
- Hong, N. X. 2002. Indigenous Knowledge of Hong Ha People in Their Traditional Slash and Burn Cultivation, Community-based Upland natural Resource Management, Hue University of Agriculture and Forestry.
- GSGES of Kyoto University and Office for International Co-operation of Hue University. n.d. Report on the result of baseline survey in Hong Ha.
- Mizuno, K. 2008. "A Story in Pictures: Landscape and Life in Hue, Central Vietnam", An Environmental Journal for the Global Community, No.3.
- Yamasaki, K., Cach, N. T., and Tanaka, U. 2007, GSGES Asia Platform, Education and Research Co-operation on Environment and Disaster Management for Human Security in Asia, Annual Report 2006.
- トレイシー・ガノン、飯塚明子、グエン・チ・ホン・マイ. 2008. 「環境とジェンダー—ベトナム中部・山間地域での伝統織物教室の記録と評価」『地球環境学へのアプローチ』丸善, pp. 205-225.
- 水野啓. 2008. 「環境と国際協力—地球環境学堂ベトナムプロジェクトからのメッセージ」『地球環境学へのアプローチ』丸善, pp. 226-234.